

## 論文審査の結果の要旨

氏名 吉中 俊貴

本論文が対象とするのは、十九世紀末ウィーンを代表する作家シュニッツラーの主として散文作品である。緻密な作品分析に基づき、シュニッツラーの「詩学」を明らかにすることが目標とされる。

著者は、本論文執筆中、二年間ヴッパータール大学に留学していたが、この大学は現代ドイツにおける〈物語理論〉の大きな研究拠点であると同時に、現在刊行準備中の「歴史批判版シュニッツラー全集」の編集作業の中核を担っていてもいる。この地の利を生かし、著者は物語理論のこれまでの展開と新たな潮流にも目配りを利かせつつ、未刊行の資料にもとづく生成論的研究の最新の成果も踏まえたうえで、自己のオリジナルな主張を展開しようとしており、その研究態度は高く評価するに値する。

全体は三部構成である。初期の中編『グストル少尉』を中心とした〈語りの技法論〉に主眼を置いた第一部においては、『グストル少尉』に至るまでのシュニッツラーの歩みを、特にバルザック以降のフランス小説美学の変遷との関連で追いながら、〈モノローグにおける多声性〉という特色を有する〈自律内的独白〉の技法がウィーンという場におけるさまざまな階層・集団・個人の思考と欲望を表現する装置として機能していることが明らかにされる。第二部では中期の長編『戸外への道』の分析にもとづく〈ロマン論〉を中心とし、多声性が〈パロディ〉という技法との関連においてさらに分析されている。第三部では、フロイトとの関係を中心として、シュニッツラーが精神分析とどのようにかわり、どこで別の道を歩むに至るかが詳細に追跡される。「個々の要素に分節化された顕在の言語表現が組み換えを受け、別の文脈で分析的にかたりなおされる」とする「機能論的言語観」をフロイトと共有しながら、「間意識」における生成と力動が社会へと開かれている事態に注目するシュニッツラーの独自性が明らかにされ、論は閉じられる。各部の分析において、語りの技法・登場人物の布置などをめぐる文学理論的観点からなる分析が、第一次大戦勃発までのハプスブルク帝国における複雑な民族関係・社会階層間の軋轢と衝突・そしてユダヤ人のアイデンティティをめぐる自己了解—シオニズムとの関係も含めて—といった社会的・歴史的な諸問題をおのずから浮かび上がらせてくるところに、本論文の優れた点を見ることができる。

本論文は、時に著者の文学観を展開するに急で、細部における論証に若干図式性が強すぎると感じさせる箇所があり、その点は惜しまれるが、緻密な読みに基づいて説得力ある論理を貫徹した力量は高い評価に値するものである。以上に鑑み、本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に相当するものと評価する。